

## 広域モニタリングの影響確認手法（案）

「広域モニタリング」による事業影響の確認フローにおいて、最初に、一次影響項目（二次影響項目）が現状変化幅以上の変化が生じているかの確認を行うことになっている。

「環境の現状変化幅」について、次回協議会提示資料の確認のため、以下の事項について、例を提示し確認する。

- ① 現状の環境変化の幅の対象期間
- ② 現状の環境変化幅の事例

### (1) 環境の現状変化幅の対象期間について

「大橋川改修事業 環境調査最終とりまとめ」では、事業影響予測評価の対象期間として、当時の最新データや、主要な渇水年や豊水年を含む平成 6 年～15 年の 10 カ年を対象とした。当時は、環境変化幅としては、この 10 カ年を対象とした。

その後、平成 22 年 9 月に「斐伊川水系河川整備計画」を策定し、現在、大橋川改修事業着手に向け、関係者との設計協議等を行っている状況である。

このため、現状（環境変化幅の対象期間）としては、工事着手前の平成 22 年までを対象とする。



現状の環境変化の幅は、事業影響予測を実施した期間（H6～H15）以降においても変動しているため、工事着手前の平成 6 年～平成 22 年の 17 年間を対象に整理を行うこととする。

### (2) 環境の現状変化幅の事例

事業影響の確認を行なう際には、環境変化が及ぼす各種影響を勘案して、観測値の期間内の平均値だけでなく、最大値や最小値の変化状況も確認することが重要である。

このため、一次影響確認項目及び二次影響確認項目については、観測値（水位・塩分は時間単位）の各月の平均値、最大値、最小値を影響確認の指標値として、評価年の指標値が、現状の環境変化幅（平成 6 年～平成 22 年の 17 年間における各指標値の各月の最大～最小の変化幅）を超過していないか、確認するものとする。

ここで、一次影響確認項目の水位・塩分について、現在、整理できる資料から、「現状の環境変化幅」と「評価年観測値」の対比図を事例的に、図 1～2（湖内水位）、図 3～4（湖内塩分）に示す。

|            | 現状の環境変化幅の対象年   | 評価年     |
|------------|----------------|---------|
| 事業着手後の影響確認 | 平成 6 年～平成 22 年 | 着手後毎年   |
| 今回の事例提示    | 平成 6 年～平成 20 年 | 平成 21 年 |

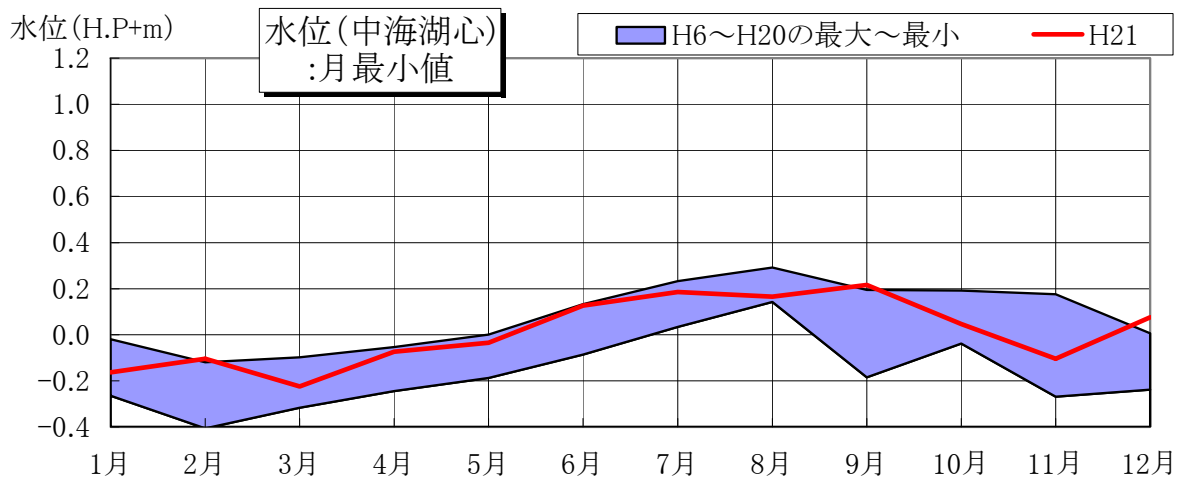
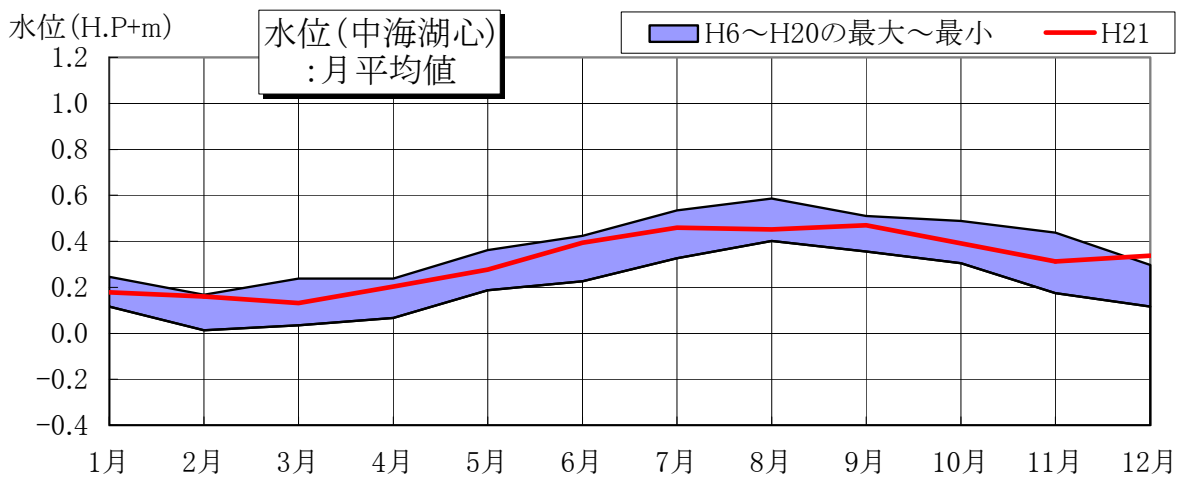
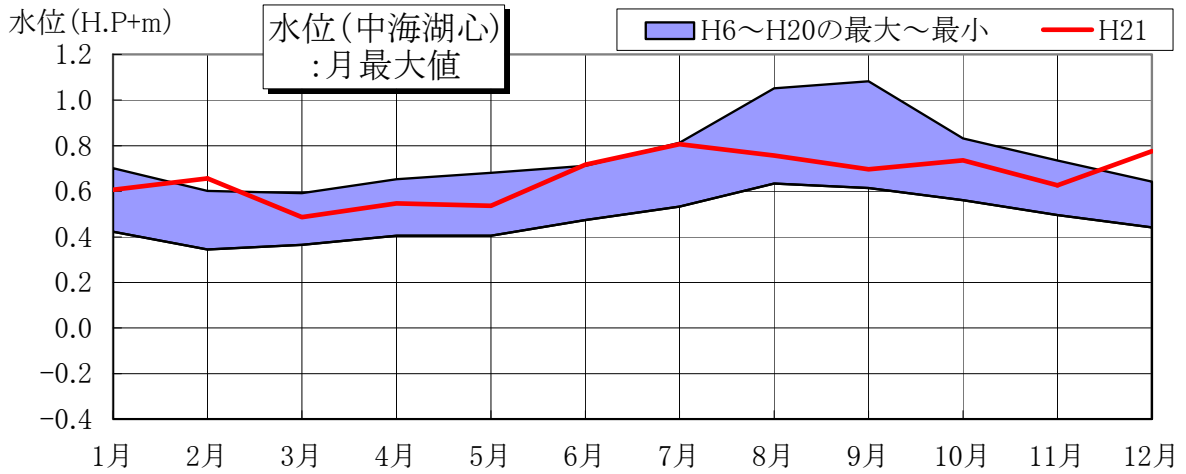


図1 湖内水位 (中海湖心) の評価年観測値と現状の環境変化幅との関係

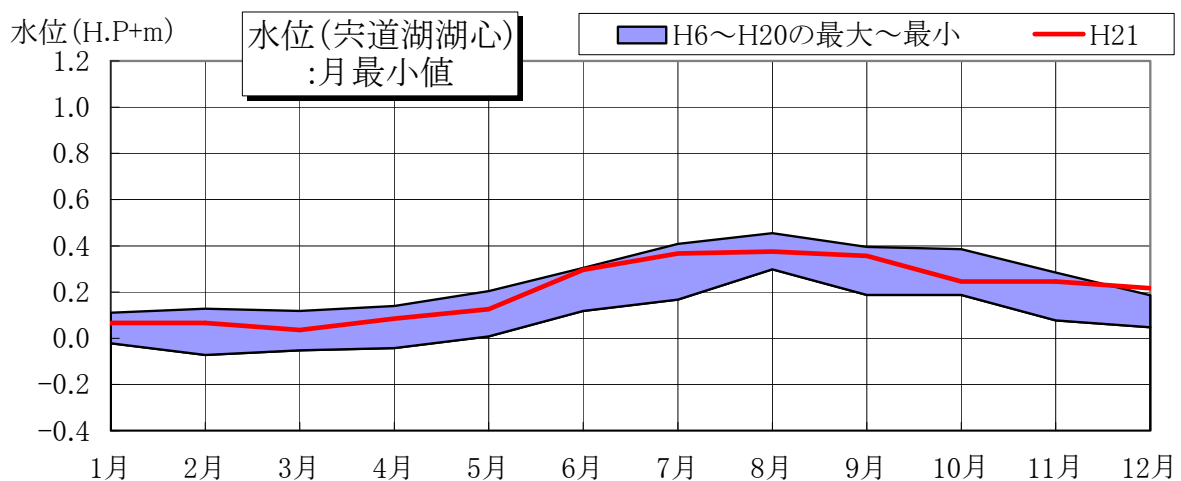
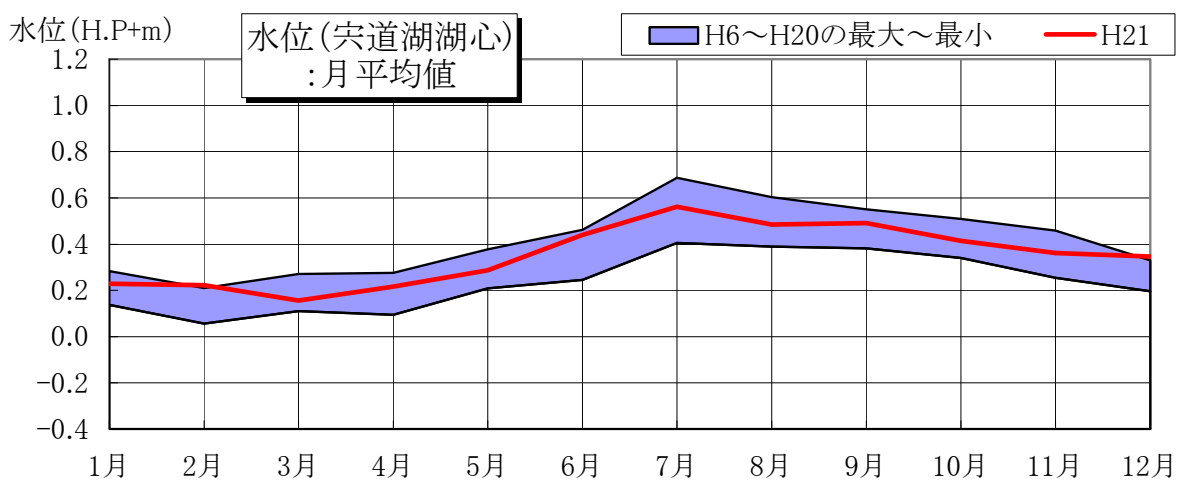
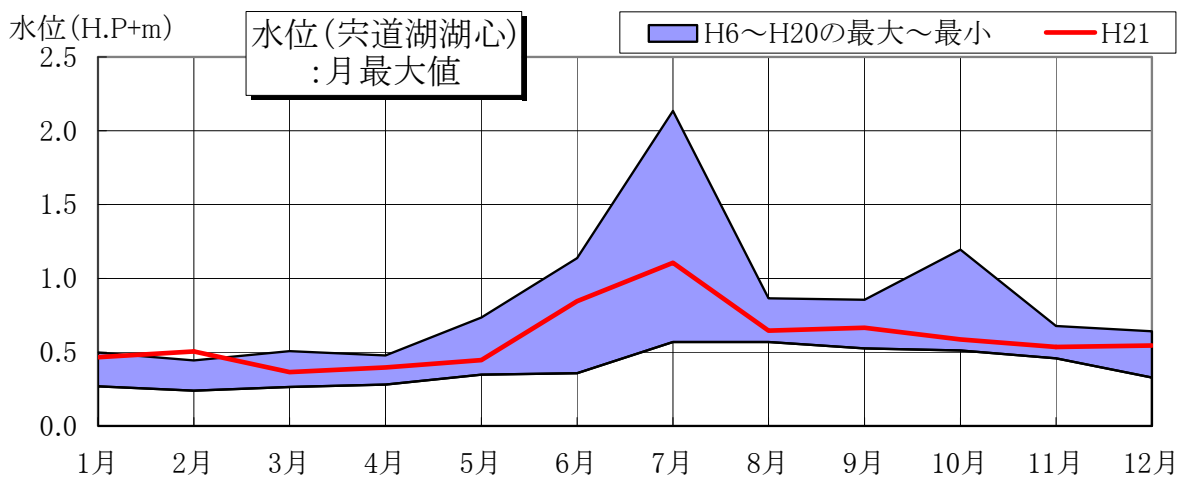


図2 湖内水位 (宍道湖湖心) の評価年観測値と現状の環境変化幅との関係

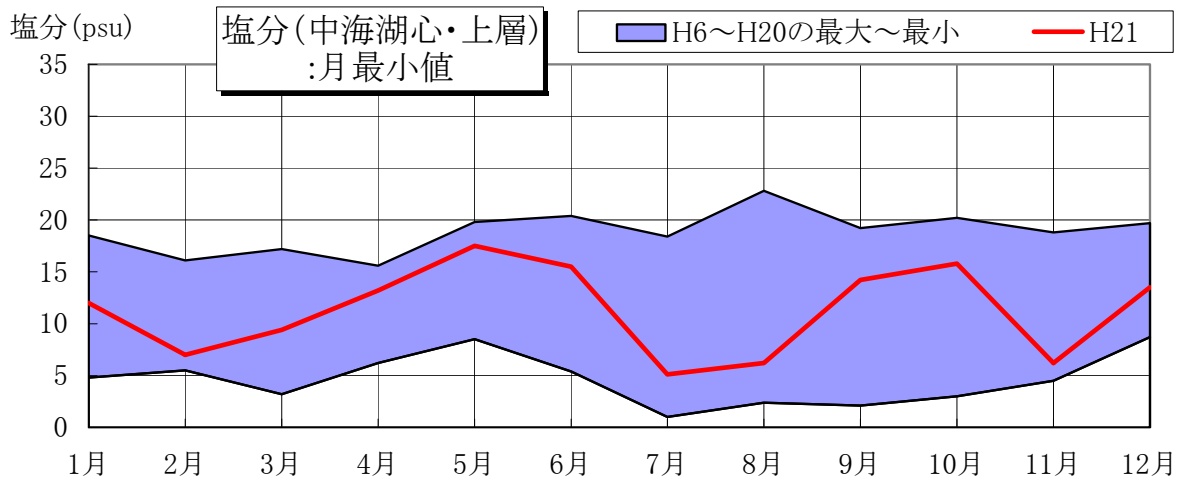
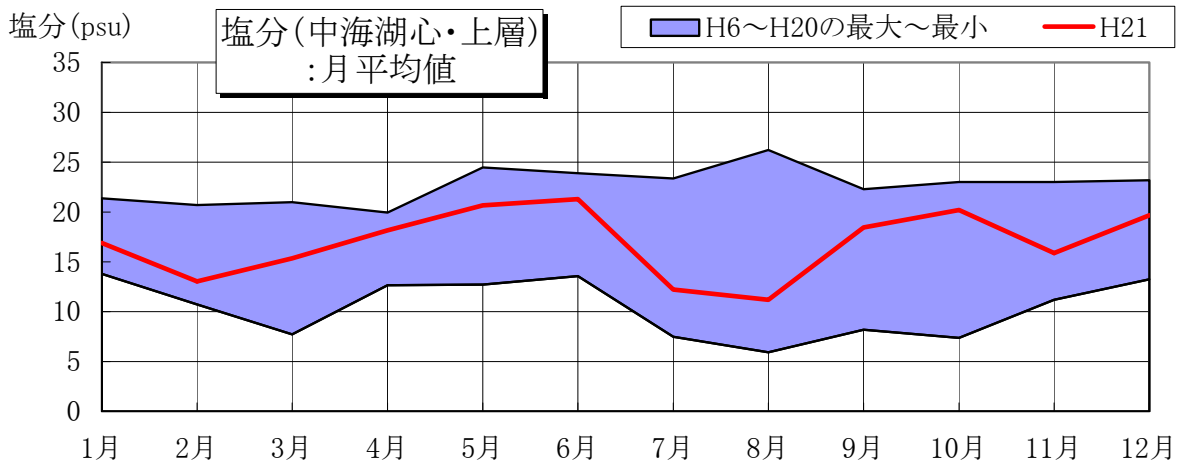
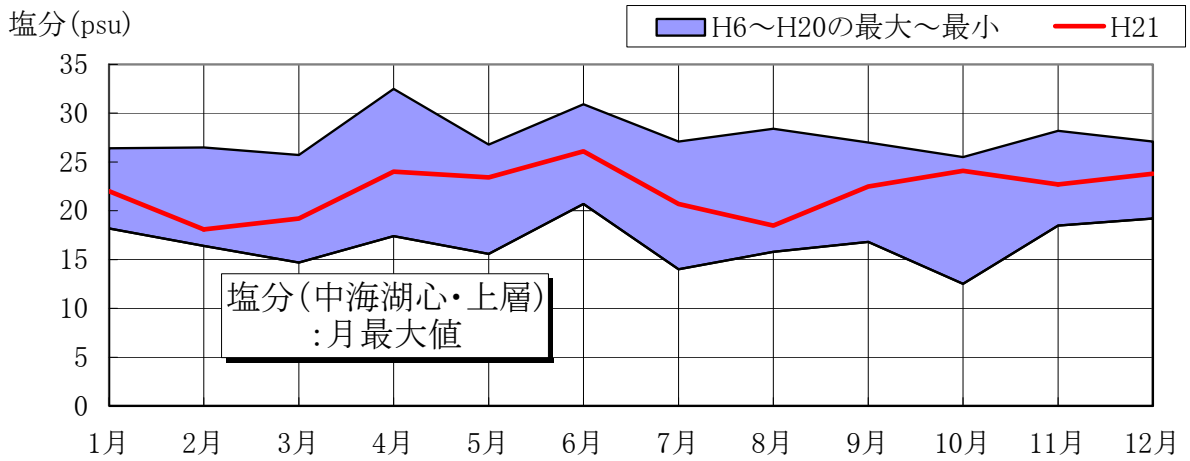


図 3(1) 湖内塩分 (中海湖心 : 上層) の評価年観測値と現状の環境変化幅との関係

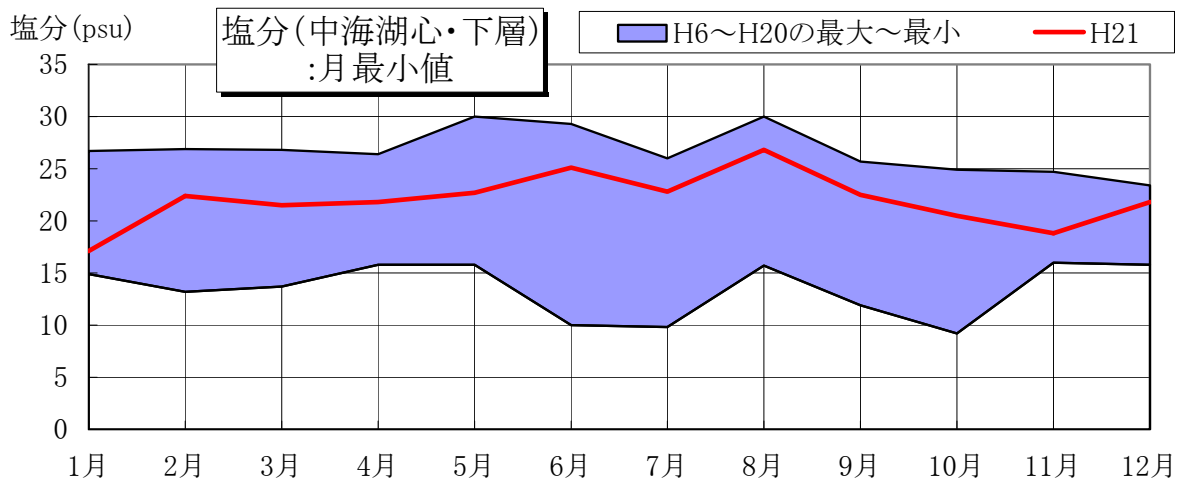
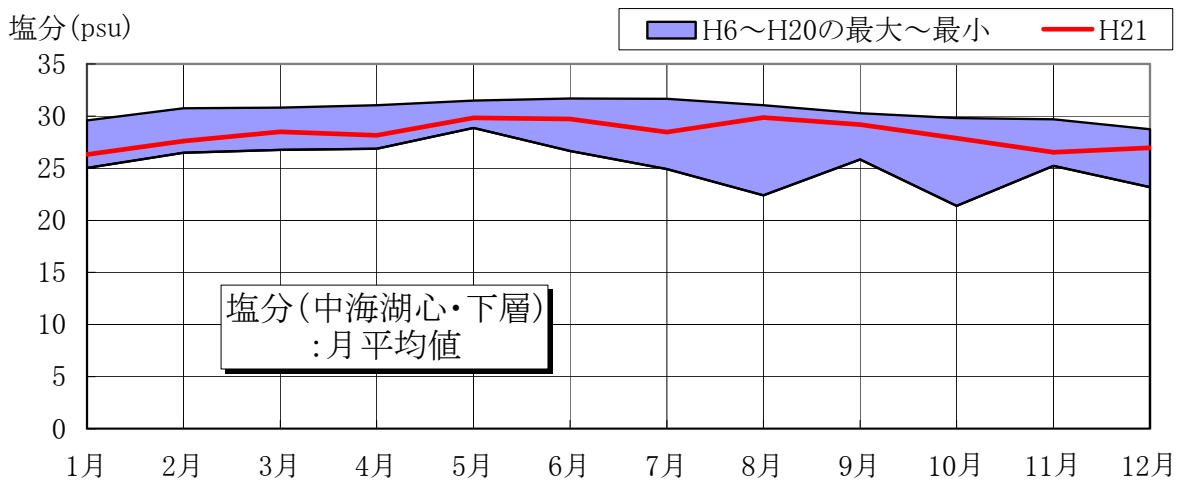
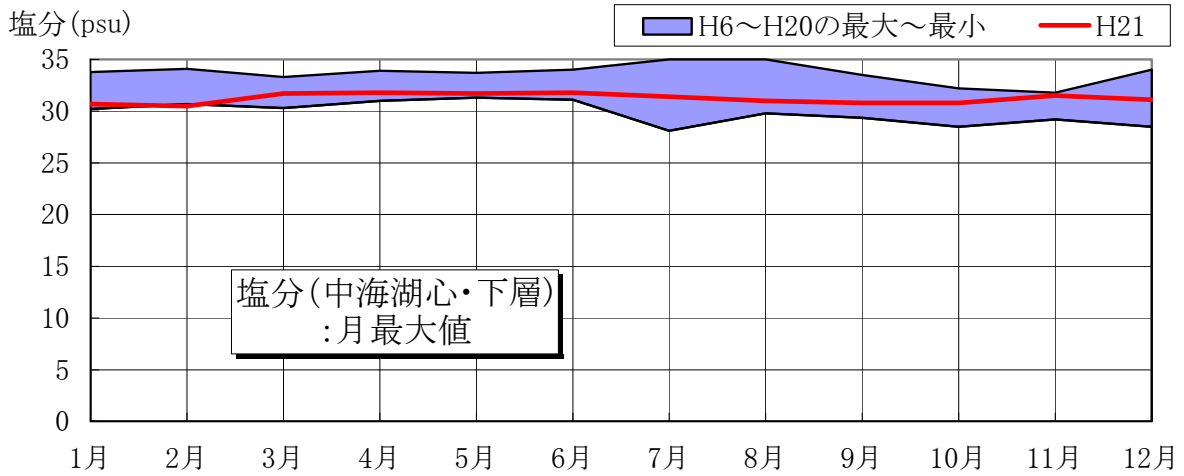


図 3(2) 湖内塩分 (中海湖心 : 下層) の評価年観測値と現状の環境変化幅との関係

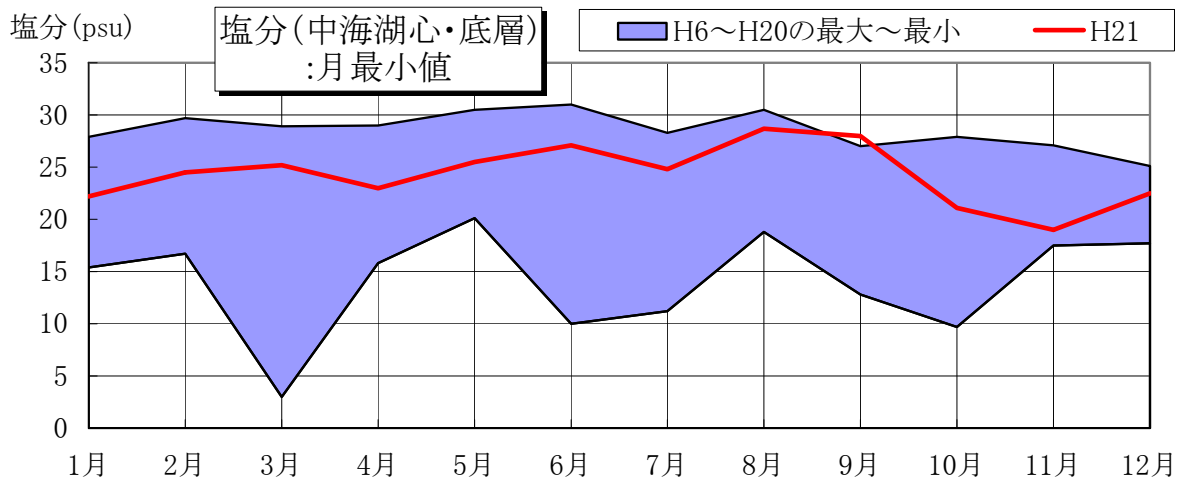
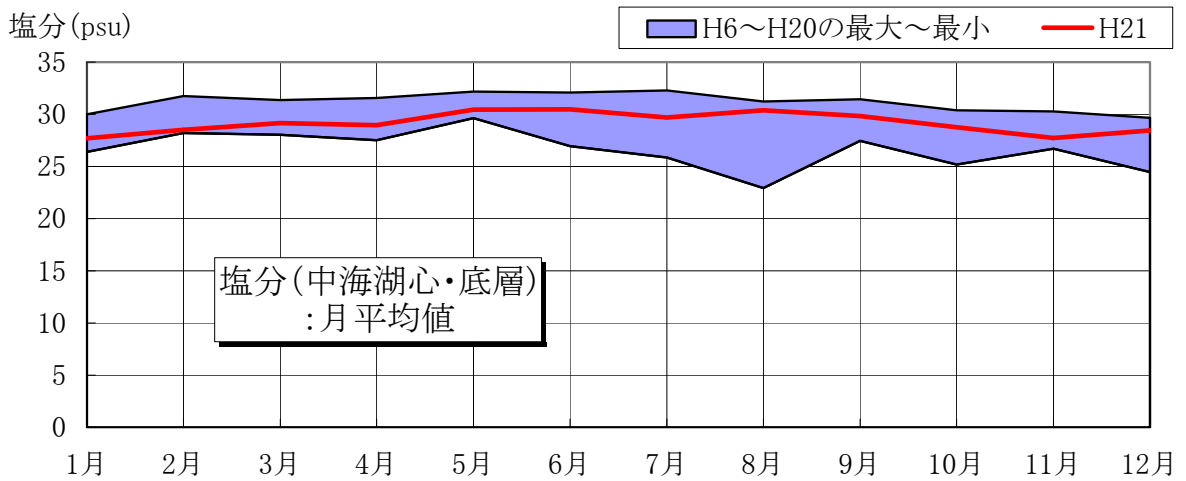
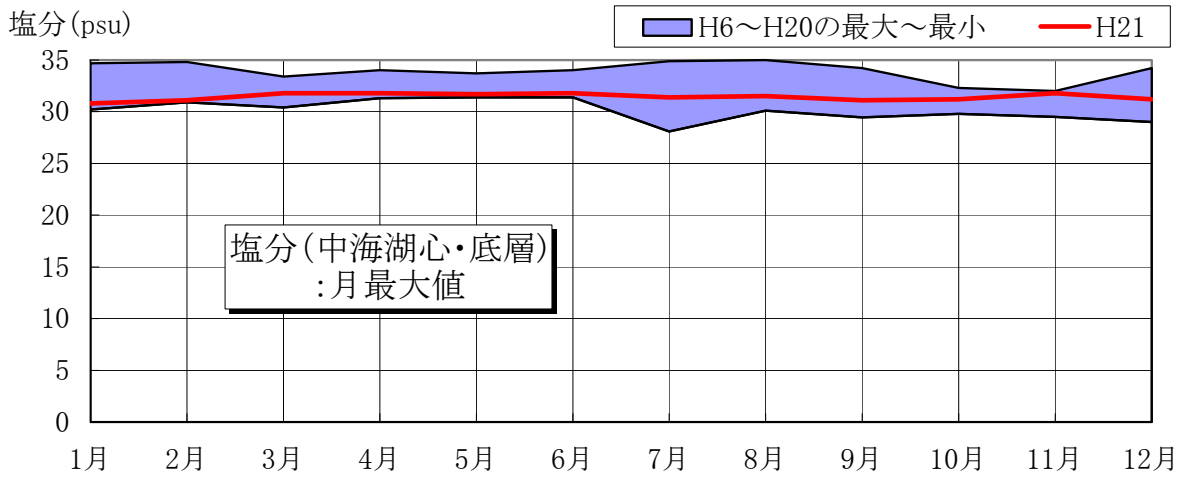


図 3(3) 湖内塩分（中海湖心：底層）の評価年観測値と現状の環境変化幅との関係

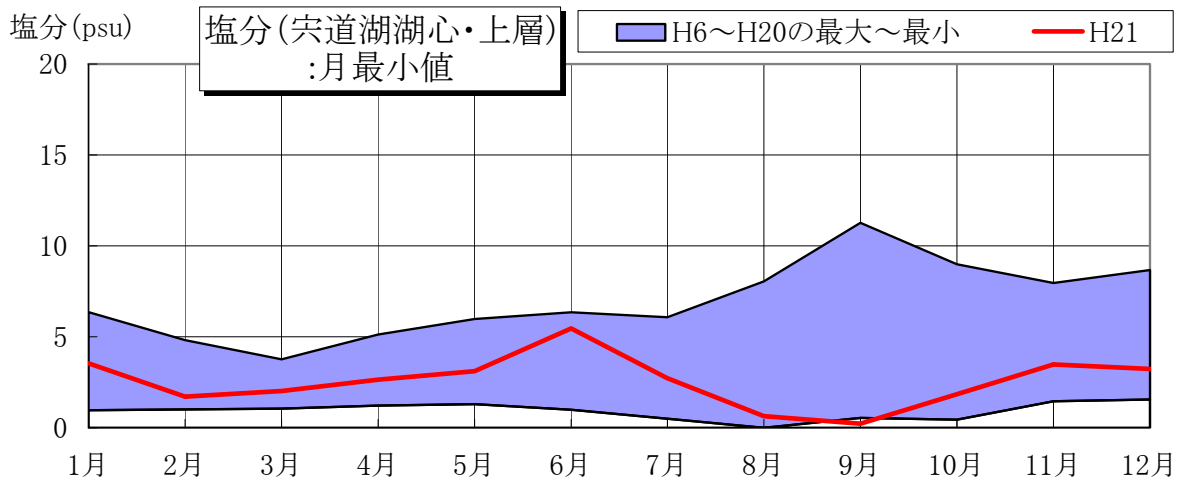
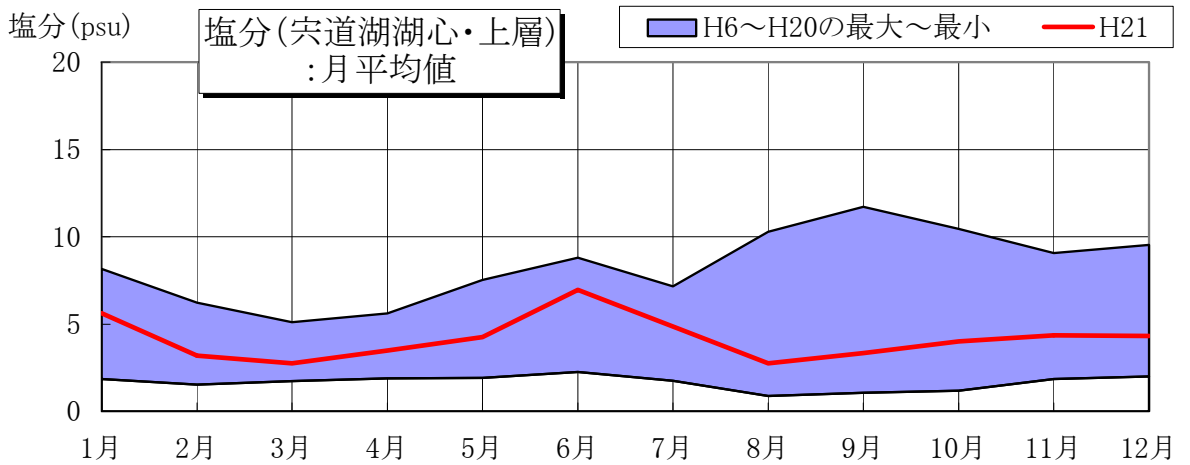
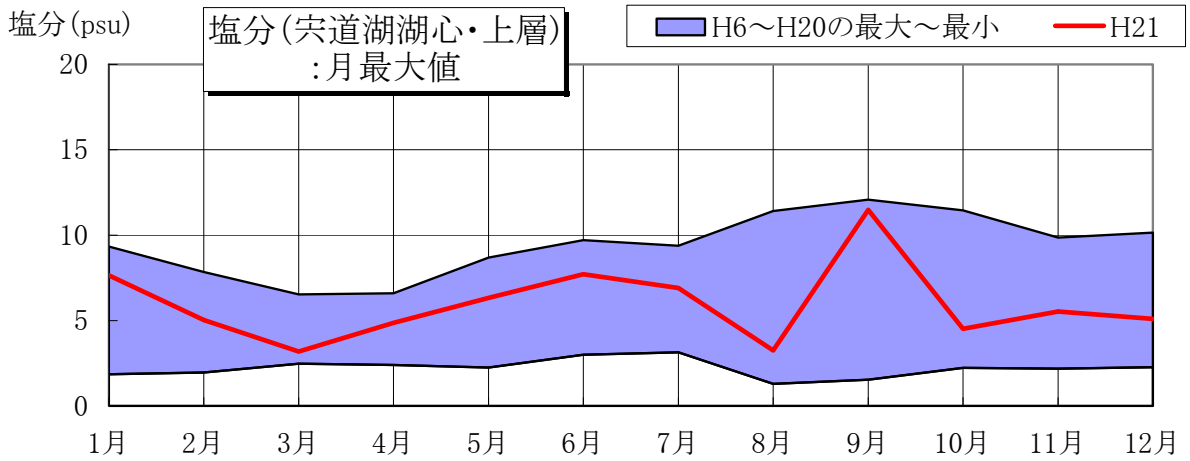


図 4(1) 湖内塩分 (宍道湖湖心 : 上層) の評価年観測値と現状の環境変化幅との関係

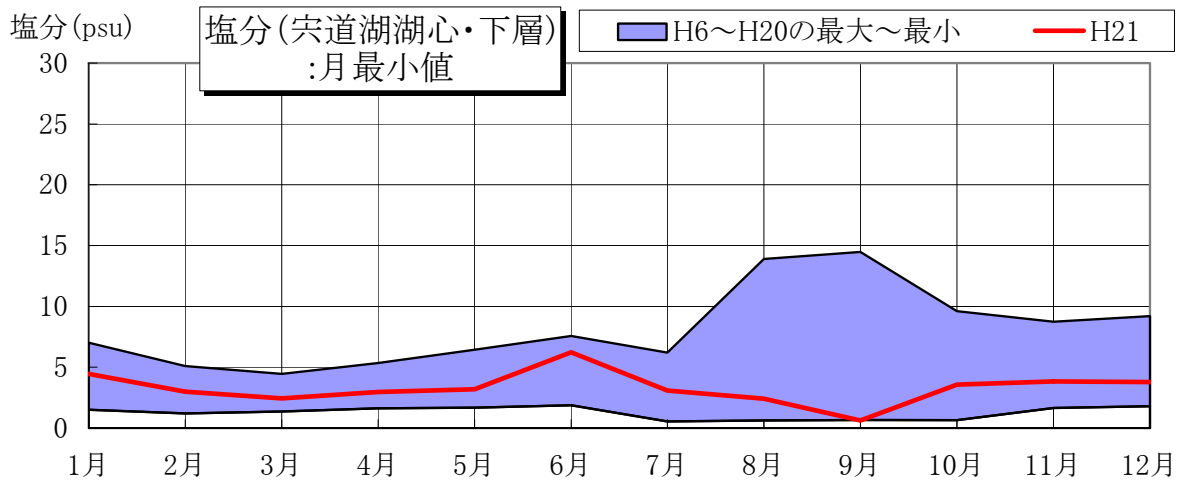
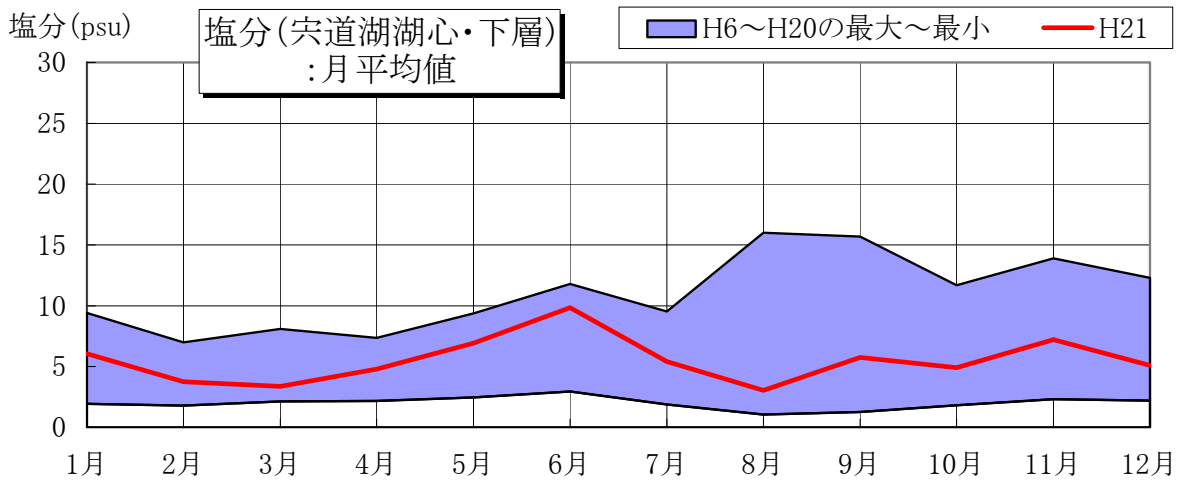
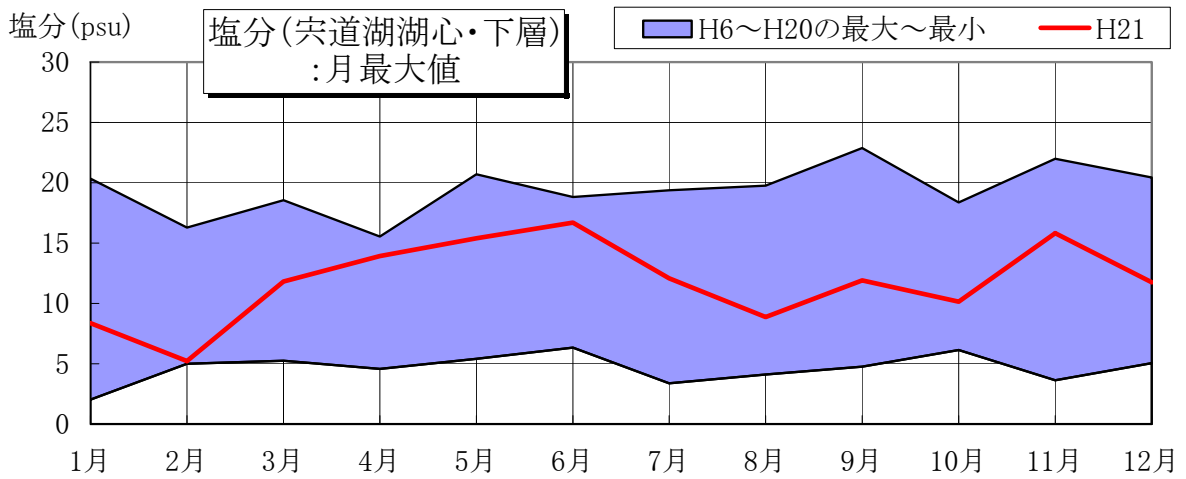


図 4(2) 湖内塩分 (宍道湖湖心 : 下層) の評価年観測値と現状の環境変化幅との関係



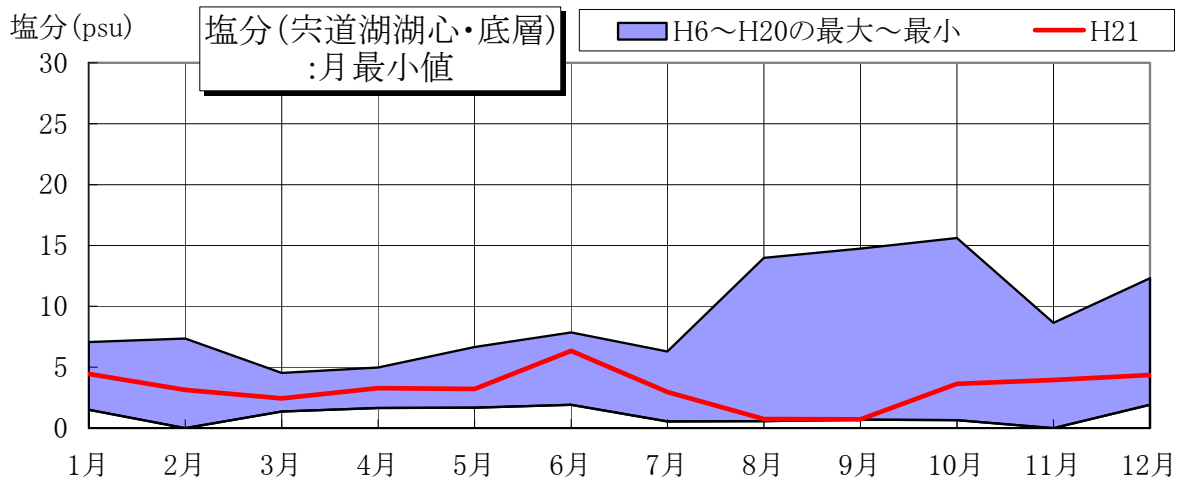
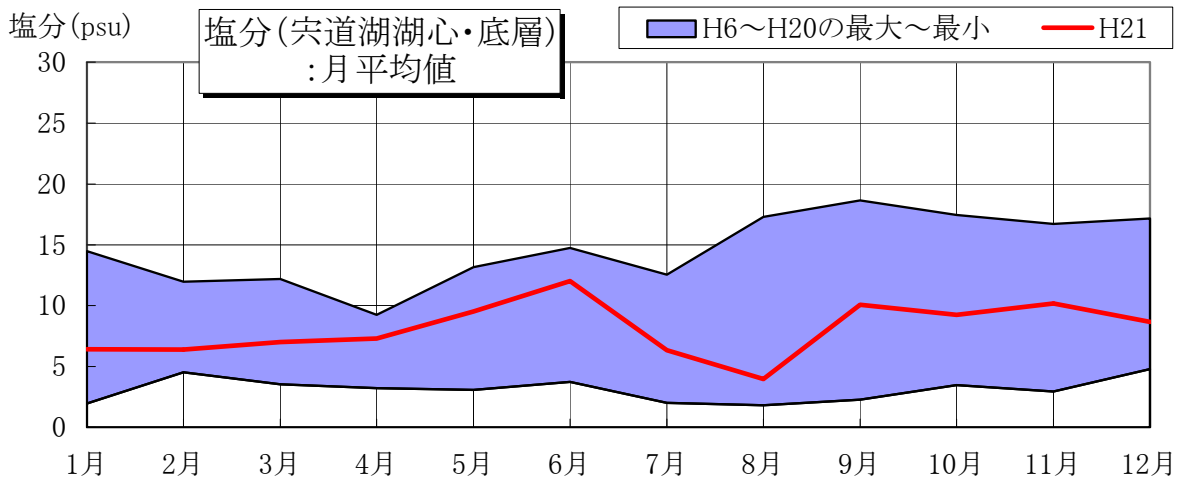
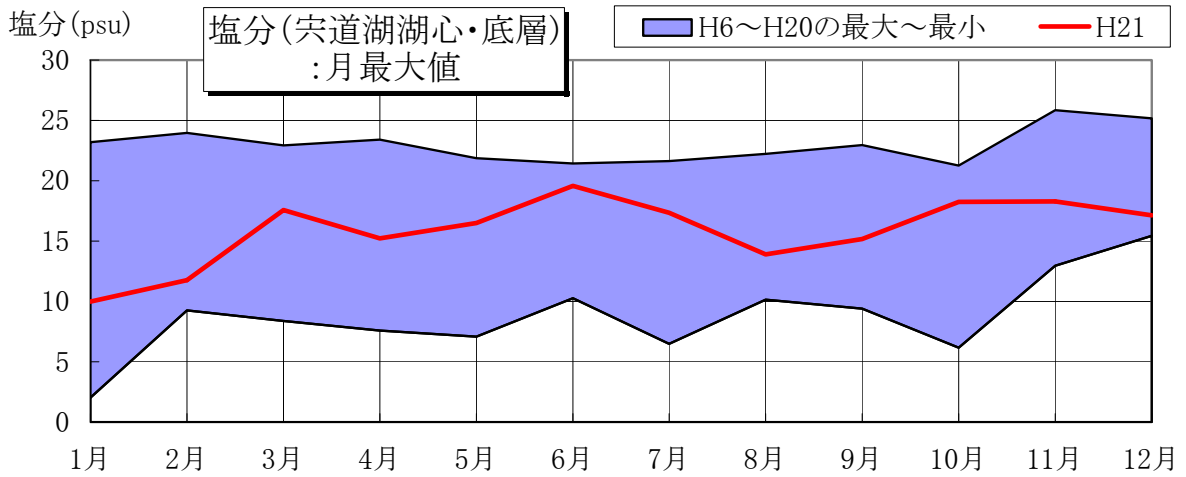


図 4(3) 湖内塩分 (宍道湖湖心 : 底層) の評価年観測値と現状の環境変化幅との関係